

巻頭言

〈特集号〉

「グローバル化と公共性」研究会の成果報告

Preface on Special Issue:

the Outcome of Research Project on “Globalization and Publicness”

特集号「「グローバル化と公共性」研究会の成果報告」は、立命館大学人文科学研究所の重点プロジェクト「グローバル化とアジアの地域」の政治・経済グループ（旧：「グローバル化と公共性」研究会）の活動成果および研究成果をまとめたものである。

本研究会は2005年に活動を開始し（母体となった研究会に遡れば、1990年代には活動を始めていた）、「グローバル化がもたらす諸影響に関して、国家の変容やリージョナリズムの台頭に注目して、学際的・多角的な観点から考察を行うこと」、「新自由主義が台頭するなかでの自由で公正な社会のあり方を、公共性や民主主義といった概念に注目して検討すること」などに取り組んできた。巻頭企画で言及するように、問題意識を共有する研究者が協働して、上記の研究課題に関する学際的な研究を進め、数多くの成果を発信してきたことに加え、韓国の中央大学および中国の暨南大学と「日韓中三大学シンポジウム」を定期的を開催するなど、国際的な研究ネットワークの構築にも尽力してきた。このように、本研究会は、これまで数多くの学術的成果や知的遺産を残してきた一方で、近年では研究会メンバーの高齢化や不足といった課題にも直面しており、今後の展開に関して検討が必要な状況であった。本研究会の成果や蓄積を継承し、発展させていくためには、現在までの歩みを確認し、到達点と課題を明らかにした上で、展望を考察していくことが不可欠である。この特集号は、これらの課題に応え、「グローバル化と公共性」研究会の意義と課題を確認し、今後の発展の方向性を模索するために

企画された。

まず第一部「「グローバル化と公共性」研究会のこれまで」は、長年にわたり本研究会を牽引してきたメンバーと現行メンバーによる座談会の成果と、研究会メンバーによる最新の研究成果から構成されている。座談会では、本研究会の背景と問題意識、到達点と課題などが整理され、今後進むべき道に関して、いくつかの方向性が提案された。そして、研究会メンバーによる各論文は、本研究会の日常的な研究活動の成果を示すだけでなく、本研究会に通底する問題意識や研究上の特徴を明らかにするものでもある。各論文は、座談会の成果とともに、本研究会が「未来志向の批判的な社会分析」に関する学際的な研究プラットフォームとして学術的・社会的な意義を有していることを示している。

第二部「市民社会の変遷に関する現代史的考察」は、博士後期課程に在籍する若手研究者を中心とした研究会の成果を取りまとめたものである。研究会メンバーの高齢化や不足といった課題への対応として、本研究会は、若手研究者の育成や支援にも力を入れてきた。その一環として、「市民社会の可能性と課題に関する学際的分析」をテーマとした研究会を設け、定期的開催してきた。社会学、経済学、政治学、歴史学、思想（史）研究といった多様な学問的背景をもった若手研究者が集い、各自の研究に関する報告を行ったり、上記の共通テーマに関する研究を進めてきた。第二部に所収の論文は、対象やアプローチが大きく異なるが、「市民社会の可能性と課題」に関する分析を行うものでもあり、研究プラットフォームとしての本研究会の新たな可能性を示すものといえる。

第三部「先達に学ぶ」は、戦後日本の学術界を牽引してきた研究者に、自らの研究来歴や今後への期待などを伺うものである。「研究者としてのパーソナル・ヒストリー」をアクセス可能な形で記録しておくという試みは、これまで日本の学術界では十分になされてこなかった。この背景には、研究者の業績として、研究成果である論文や著作さえ残れば十分であるという考え

があったからであろう。しかし、研究者の問題意識や、学術的背景と社会的文脈といった情報は、その研究業績を理解する上で貴重な情報でもある。加えて、現在の学問は先達の知的遺産のもとに成立するものである以上、後続世代は先達の努力（の成果）と真摯に向き合い、それらを発展させ、次世代に継承していくことが責務となる。その際に、「研究者としてのパーソナル・ヒストリー」は有益な知見をもたらす。第三部の試みをきっかけに、日本の学術界において、研究業績それ自身だけでなく、その背景に関する諸情報も合わせて蓄積が進んでいくことを期待している。また、人文研の企画としても定着させていきたいと考えている。

以上のように、本特集号は、立命館大学人文科学研究所における重要なプロジェクトとして、長年にわたり研究を積み重ねてきた「グローバル化と公共性」研究会の歩み、そしてその到達点と今後の展開可能性を示すものである。この特集号が、本研究会の学術的意義と社会的貢献を確認する機会となるだけでなく、本研究会の今後のさらなる発展の第一歩となることを期待している。言い換えれば、本研究会を牽引してきたメンバーの思いと成果を今後につなげ発展させていく際の参照点となり、また立命館大学における研究プラットフォームを発展させていく際の手がかりとなれば幸いである。

最後に、本研究会の運営に直接的に携わってきた研究会メンバー（とくに、中谷義和氏、西口清勝氏、松下冽氏、故・篠田武司氏）、本研究会に様々な形で協力して下さった国内・海外の研究者の皆さま、そして人文科学研究所事務局の皆さまに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

立命館大学産業社会学部准教授

加藤 雅俊

